
琴結学園の荒日常

シンシヨク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

琴結学園の荒日常

【Nコード】

N6803M

【作者名】

シンシヨク

【あらすじ】

広大な敷地を有する彼らの学び舎「琴結学園」。これはこの場所でおこる毎日の日常と非日常の物語である。

「カット！カット！」

「恋愛ストーリーなのよ」

「ばれますって。」

「夏の大会はどうするんだ？」

「どうして、ここにいらっしゃるんだ？」

「この学園を出るためだ。」

様々な出来事が織り成す、学園ストーリー

1話「学園生活？」

文武両立という言葉がある。

意味としては、学生の身分であれば分かると思っが、勉強と部活動を両立することである。

はたして、それが思うようにいく学生が一体どれだけいるのだろうか？

必ずではないにしろ、勉強が疎か、又は部活動が疎かになる人が少なからずいるはずである。

そして、最悪どちらも疎か・・・というのは同情はできないので、ついていけなくなった。とても言い換えておこつ。そう言う人中には存在する。

何故こんな盛り上がり欠けるようなことを話題に出しているのかと言つと、今現在僕の目の前にいる人の境遇がまさにそれであるからである。

「やっぱり考え直せよ。そんなことをしても、みんなが悲しむだけだ。」

僕は目の前の友達に説得を試みている。すると目の前の友達は絶望に屈したような顔で僕に返してきた。

「お前には分からないんだよ！ ショウカ！ お前みたいに俺は勉強もできないし、運動もいまひとつだ。それなら俺なんか消えたほう

がマシだ！」

どうしても、説得には応じてはくれない気配だった。とうの本人は本気みたいだが、どうしても同情はできない。

「（文武両立ができないから、自殺なんてな・・・）」

だが事は深刻だ。なんとかして止めないと大切なものを失ってしまうことになる。こうなったら捕まるなり、気絶させるなりするしかない。しかし

「俺は何と言われようと、本気だからな。そこから一步でも近づいてみる。すぐにここから飛び降りてやる。」

ここは学校の屋上しかも、相手は手摺りの向こう側。近づけば飛び降りると言っている。やっぱり説得するしかないみたいだった。

「なあ、頼むから考えを変えてくれ。勉強が出来なくても楽しいことが沢山あるじゃないか。」

これが最後の説得になるかもしれない。

「楽しいこと・・・そんなもん。」

「無いって言うのか。じゃあお前がクラスでみんなと楽しく笑っていた感情は嘘だったのか。」

作り笑いには限界がある。どんなに、例え自殺したくなるような立

場の場所でも楽しい事が必ずあるのだ。

「つつ・・・」

「（よし手応えありだ。もう少しで助けられることができる。）」
僕は最後の押しに入る。

「生きてれば、良いことがたくさんあるんだ。だからこっちに帰ってこい。」

僕は最後の説得を終了させた。これで靡いてくれないければ、僕は友達を一人失うことになってしまうのだろうか・・・
そして数秒、冷戦のような間が続く。そして

「・・・分かった。お前の言う通りだな。死んだら何もないもんな。今からそっちに戻る・・・」

俯いている顔からその言葉が聞こえた。しかし俯いている顔は少し笑顔があるようにも見えた。

とにかく一件落着といたしますか。これでまた普段の生活が・・・

ガコン！

・・・今の音は・・・？

一体、何が起こったのだろうか？

僕は今まで、友達と話していたはずだ。そして数秒前に説得に成功した。したはずだ。だが・・・

「なんで？なんであいつ、手摺り事いなくなってるんだよ！」
最悪の事態が本人の意思ではなく起こってしまった。僕は、手摺りの無くなっている部分に走り屋上から下を見た。

そこには絶対に受け止めるのが無理な残酷な現実の光景があった。

「・・・嘘だ・・・嘘だ！！」

僕はその場で、頭を抱え額をコンクリート作りの屋上につけるような体勢で、叫んでいた。

叫んでも変わらないのは分かっていたはずなのに。

その場所でどれだけ同じ体勢でいたのだろうか・・・変えられなかったのか、あいつは望み通りで納得したのか？
僕は立ち上がり空を見上げる。

「何も変わらなかったんだ。説得しようと、しまいと・・・」
涙は流れなかった。

僕が立っている屋上に今、あるもの、僕と材料のコンクリート、吹き抜ける風、そして・・・

「カット!!カット!!」

・・・空気を読まない叫び声?

〵 琴結学園 中央校舎 屋上 〵

「カットって言ってるんだから早く戻ってきなさい!」僕は空気をぶち壊した犯人のもとに駆け寄る。

「ちょっと待て、ここまでやらせておいてカットは無いだろ!?!一体何が駄目なんだ?」

ここまで本気でやらせておいて中断は納得できなかった。僕はもっともらしい答えだけを希望した。

「カットの理由?まず一つ目、リアリティが無いわ。」

「今、そこ言つの!?!撮影が始まる以前に指摘してくれよ!?!」

「次に二つ目。」

完璧に無視で話しを進め始めた。

「涙がながれてない。」

「はい？」

すると、監督は機嫌が悪そうに答えた。

「『はい？』じゃなくて、涙よ！涙！分かる？こういうシーンでは流すのが普通でしょ！」

なんという、無茶要求だと思った。

「プロでも無いのに簡単にできるか！」

「とにかく！下の方に伝えて、みんなも今日は一旦解散！」

「お、おい・・・」

そう言い、スタスタと台本だけ持って帰ってしまった。その後、撮影の邪魔にならないようにと物陰に隠れていたみんなが、続々と出て来た。

僕は一旦みんなに切り上げを伝えることにした。

「みんな、今日はここで中止みたいだ。解散してくれ。僕は下の方に伝えてくる。」

そう伝えるとみんな自分の機材を片付け始めた。僕も早くさっき飛び降りシーンをやった友達に伝えに行くことにして、屋上から出た。

ガチャガチャと、カメラやマイクといった機材を片付けている屋上・・・というのが表向きである。

実際は。

「ちゃんと撮れてる?」

カメラを、屋上から出て行く少年にピントを合わせている男に微笑みながら聞いてきた。

「はい。バッチリです。これはいい物が出来上がるかもしれませんね。」

そうカメラに目を向けたまま答えると聞いてきた女が答えた。

「もちろんよ。絶対この隠し撮りで恋愛ストーリーを完成させるわよ。」

「カットの寄せ集めですけどね。」

そうカメラの男が呟くと怒ったように反論してきた。

「そこを言ったらおしまいでしょ。あの二人がもうちょっと素直になってくれば、編集もはかどるのに!」

そんな愚痴を聞くのも飽きたような顔しながら顔をカメラに向けていた。

ちなみに二人というのは、先程監督をしていた女子とさつき、出て行った男子である。

「あの、草奏さん。今日はもうこのくらいにしませんか? 撮影は順調ですし・・・」

カメラから顔を離し恐る恐る提案する、すると

「何言ってるの、途成君。まだまだ風景とか、ベストタイムの割り出しとか、ロケーションの打ち合わせとか、やることはいっぱいあるのよ。」

「・・・」

その言葉で完璧に反論の予知をなくしてしまった。

「ほら行くわよ！途成君。」

「え？あ、ちょっと待ってください。」

そう言つて二人も、屋上から出て言った。

残りのみんなも片付けを終えた人から帰っていった。

かすかにクスクスという、小さな笑い声が数秒あったかもしれない。

〔琴結学園 中央校舎 1階廊下〕

「え？カットで今日は中止？」

「そう・・・悪いけど今日は終わりだ。」

僕は撮影の終了を伝えに来ている。ちなみに目の前にいるのはさつき飛び降りシーンで飛び降りてくれた人だ。

名前を、片桐当夜カタギリトウヤと言う。ちなみに設定ではなく実際に友達である。

「バンジージャンプも楽しくないから、終わって欲しかったんだが、まあ仕方ないか？」

「僕に聞くなつて。それにしても本当にこんなんで完成すると思うか？」

僕は今一番心配なことを聞いてみた。

「俺に聞いても分からない。アヤの決めた予定ならなんとかなるだろう？」

「それを信じるしかないか。アヤは何を考えているのやら。」アヤというのは、僕達がやっている映画撮影の第一人者。

監督である。

名前を青蘭アヤ（セイランアヤ）という。

「とりあえず食堂にでも行こう。飛んだら腹減った？」

「お前が腹減ったのな。よし少し早いけどご飯にしよう。」

僕と当夜は、学食に向かうことにした。早いとは言え腹が減るのは時間的に頷ける。

現在時刻 17時32分

〱 琴結学園 中央校舎 2階学生大食堂 〱

学食に来てみると、やはり時間的に早いのか、生徒の存在など感じなかった。しかし一人だけ生徒を確認した。

「あれ？珍しい・・・ってアヤ？」

「ん？何？あんたも来たの。」

誰もいない学食で、食事をしていたのは先程まで当夜と噂していたアヤであった。

「腹が減ったからな。」

「そう。」

そう言うと、アヤは自分の頼んだ狐うどんを黙々と食べ始めた。

「・・・」

「・・・」

どうにも気まずい・・・しかしアヤとはさっきのことのせいで話す話題が見つからないのが現状だ。

ちなみに当夜は僕のもいっしょに食券を買いに行ってもらっている。

「あ、あのさ・・・」

あまりに間が持たないので、無理矢理会話を行うことにした。

「なによ？」

ちなみに僕はアヤの方を向いて話しているのだが、アヤは狐うどんを見ながら答えた。

「や、やっぱり涙とかは目薬でなんとか——」

バン！

僕が話し終わる前に机に器を力強く置いた音により遮られた。やはりこの話題は……

「あの、アヤ。」

すると席から素早く立ち上がり器を持って僕の横に、僕の向いてい
る方向と逆に向いて立ち止まった。
するとアヤから話し始めた。

「実を言つとね。あのシーン私書いた記憶が無いの。」

「え？」

僕は今衝撃的な事を聞いた気がした。しかしまったく話が見えない。
あの映画の台本は4パートに分かれて作っていた。そしてあのシー
ンは3冊目に書いているのだが、すべて手掛けたのはアヤだったは
ず。

「それどういうことだ？」

そう投げ掛けると、ため息をしたのちアヤは話し始めた。

「昨日、夜遅くまで今日やったシーンの脚本の最終推敲をやった
の。それで……」

何故か言葉が言い淀む。
言いにくいのだろうか。

「『それで』何だ？」

「み、みんなには言わないでよ！そ、それで不覚ながら途中で寝ちやったみたいだったの……」

成る程。言い淀んだのはプライドのせいだった。

しかし肝心の最初の言葉とはまだ繋がっていないが

「それが、どういう関係があるんだ。」

「ここからが肝心なところ。眠っていた私はまず起きてから書き途中だった台本を見て驚いたわ。」

「何に？」

そう聞くと、頭の悪い人を見るような目を一瞬して答えた。

「……私の書いた覚えのない台詞が何個か書き加えてあったのよ。」

書いた覚えのない台詞。

それを聞いて少し納得した部分はあったが、それはそれで疑問が生まれる。

「でも、そんな台詞はすぐに消せばいいじゃないか？誰かが勝手に忍び込んで書いたのかも。」

この学園は全寮制だ。

人の部屋に忍び込むのは少し頑張ればたやすいことだ。

「言ったでしょ。覚えがないって。誰かが書いたなんて証拠は無いし、もしかしたら寝ぼけ眼で自分で書いたかもしれない。もし後者なら推敲は既に終わっている。だからこの台本で行くしかないのよ。」

成る程。いろいろ煮え切らない態度の理由がわかった。

「（ん？ならもしかして。）」

「なあアヤ。」

「何よ？」

一つ確認したいことを、アヤに聞く。

「今のアヤ的にはあの台本はどう思ってるんだ？」

「撮影のときにも言ったけど、あれはリアリティが無さすぎてあまりいいとは思ってない。」

「じゃあもし、あの台本を書いたのがアヤじゃない誰かだと証明したらあの台本書き換えてくれるか？」

「ええ。そのつもり。でもそんなことできるの？」

僕は自信満々に答えた。

「ああ。絶対見つけてやる。じゃあ早速捜してくる。」

僕は一気に方向転換して、走って学食を出て学生寮に向かった。

「あ、ちよつと！・・・」

「あれ？どこ行った？」

「あ、片桐君いたの？」

「おうアヤ。なあリトしらない？」

「たった今どこかに走り去って行ったわ。」

「え？（つてことはこれどうすればいいの？）」

片桐当夜の手に持っているもの。

チャーハン × 2

餃子 × 2

人口密度の低い学食はとても広く感じる。だからこそ離れれば人の気配は増えてもあまり感じないものである。二人の会話をカメラを回しながら物陰から聞いていたとしても。

「まさかこんなシーンに出くわすなんて。」

楽しそうにテンション高めな声が途成に伝わる。

「そ、草奏さん、声が高いですよ。響きやすいんですから自重してください。」

途成が小声で草奏に促した、しかし

「こんな想定外のシーンが撮影できてるのに自重なんてできないわ

「！」

さっきよりもさらに声のボリュームが上がってしまった。

「ちょっと、本格的にばれますって！一旦寮に帰りますよ。」

途成はなんとかテンション上がりの草奏を引つ張って学食から退散することにした。

「ちょっと！まだ撮ってる途中でしょ！途成君ー！」

「もう。見つかったらなにもかも台なしなんですから分かってくださいー！」

叫び会話をしながら学生寮のほうに入って行った。

1話「学園生活？」（後書き）

さあ、書いてはみましたが。

さあ設定はその場で作る小説になりそうな事だけ言っておきます。

解説話「琴結学園」

「琴結学園 中央校舎 1階廊下」

映画撮影の3ヶ月前に遡る。具体的には4月の始めの事。とある男子生徒は朝早くに寮を出て散歩をしていた。すると

「・・・」オロオロ

「（何やってるんだ。あんなところで）」

何か拳動不審な人が目の前でうるちよろしていた。しかし制服を着ているので、琴結の生徒だということは分かった。しかし気になることがあった。

「（あの学園のマークの色は僕達と同じ学年みただけど、見たことないな。）」

ちなみに、目の前の拳動不審生徒の学園のマークは緑の色をしている。

同じ2年生である。

「・・・あ!」

拳動不審生徒がこっちに気づいたようだった。さも安心したような表情を浮かべている。そしてゆっくり僕の前に歩いてきた。

「・・・あの、聞きたいんですけど・・・」

丁寧な口調で恐る恐る話し始めた。

「ん？（道にでも迷ったのか？この学園は広いからな）」

何となく言いたいことの予想がついた。

そう、この「琴結学園」（ことゆいがくえん）は全寮制ゆえなのか恐ろしく敷地が広大であり、当然校舎の中も小中高校生が学習しているので校舎が一つではないので、慣れても迷うことがあるのだ。

「あ、あの・・・」

「どうかしたのか？」

ちなみに断っておくが、挙動不審生徒は男子生徒だ。いや特に言った意味などない。自己満足だ。

「あ、あの、この学校どれだけ広いんですか？」

「はい？」

この学園がどれだけ広いか？

その質問には答えられる自信が無かった。校舎の広さを言えばいいのか、敷地の広さを言えばいいのか分からないし、どっちともを答えろと言われればまずムリだ。

琴結学園。

校舎数、体育館と講堂を抜けば6つ。

校舎の外の敷地は山、川があり敷地内にカフェ、ゲーセン、映画館、書店、等々、娯楽施設が何故かある。

そんなことを考えていると、
急に男子生徒はあわてふためき出した。

「あ、あ、すみません。質問の順番を間違えました。」

「言いたいことがあるときは、落ちついて、まず深呼吸して。」

いろいろとテンパリすぎだ。

一応深呼吸を促してはみたが落ちつくかな。

「ふー、ふー・・・落ちつきました。」

「え？あ、それはよかった。」

今は完璧に深呼吸では無かったと思うのだが、本人が落ちついた
というので言わないことにした。

「はい。すみません質問を間違えて、僕は今年からこの学園に転校
してきたのでよく分からなくて。」

「あゝ、そうだったのか。」

成る程それなら挙動不審な理由も説明がつく。

「じゃあ僕が学園の中を案内しようか？」

「え？迷惑になるんじゃない・・・」

「たいしたことはないさ。」

少し黙りこんでしまったが、すぐに答えた。

「・・・じゃあ・・・よろしくお願いします。僕は途成みちなりっていいます。あなたは？」

「僕はリト。稀夕きせきリト。」

裏話「学園管理者」

く????

薄暗い部屋にパソコンとモニターが数台ある。パソコンに映し出されているのは、表計算のようなもの。モニターに映し出されているのは、体育館、廊下、教室、食堂と様々である。

そしてその部屋でコーヒーを飲みながら座っている男の人がいた。

「まったく、中の監視くらいもつと下の奴に遣らせればいいのによ。」

そんなことをぼやきながら、モニターをたまに見つつコーヒーを飲み、さらにパソコンに向かっていた。

すると

ウィーン

自動ドアが開き、白衣を着た女が入ってきた。入ってすぐ男に近寄り男に話しかけた。

「どうやら真面目にやってるみたいね。」

そう女が言くと男は少しいらついて話し始めた。

「そう見えるんだったら、とつと別の場所に俺を移してくれ！こんなのはもつと下の位の奴がやればいいんだよ。」

「そうはいかないわ。」

「何故だ!!」

女は一回ため息をついて答えた。

「簡単なことよ。あなたより下の位の人はこの建物ではなく、大半が学園の職員として送りだされているからよ。」

「くそっ!!」

「分かったら監視を続けなさい。京次。」

「ちっ!分かったよ。続けりゃいいんだろ。」

再びパソコンやモニターに目を向かわせた。

「そう。じゃあね。」

女は一言そう言い、部屋を出た。

部屋の外の廊下は打って変わり、白を基調とした明るい壁で統一され、実際に電灯で明るくなっている。

向こうから少し、年上の男が歩いてきて話しかけてきた

「やあ、管理者の仕事についた彼はとうだった?嬉しそうだったかい?」

「どうもこうも、あんな仕事に嬉しい人はいないと思いますが、真面目にはやっていると思いますけど。」

「そうかいそうかい。真面目にやっているのならそれでいい。琉穰君。後で彼に伝えてもらえるかな。」

「何をでしょうか？」

「監視の中でも、森の入口や海岸を特に見張るようにと。」

琉穰は言われた意味がイマイチ理解できなかった。

「何故そのような敷地の中でも遠い場所を？」

「うむ。遠いからこそ監視がいるんだよ。」

「？」

琉穰が意味不明な顔をして首を傾げていると、それを察したように話し始めた。

「今年、学園で5年に一回のイベントがあるのは知っているね。」

「はい。それは知ってます。」

「そのおかげで今年は少ないかもしれないが、やはり絶対毎年いるんだよ。」

「何がですか？」

一つため息をついて、琉穰の質問に答えた。

「……脱走者だよ。」

「え？でも、この敷地の中でできないことなんてほとんど無いはず
——」

「確かにその通りだ。しかし必ずいる。仲間がいるせいなのか毎年
後をたたないんだよ。」

「・・・」

「だから頼んだよ。」

「分かりました・・・」

琉穰は来た道に戻っていった。まったく想像のしていなかったこと
だったからだ

2話「聞き込み？開始」

〽琴結学園 中央校舎 2階廊下〽

情報収集という言葉がある。

意味は文字通りなのであまり言う意味すらないと思う。

僕は積極的に物事の情報収集を行うような性格ではないので、この言葉を使うことは極端に少ない。

しかし、何か特定の事が起これば使わざるをえないときも存在する。

「さて、誰かに聞き込みするしかないか。」

こんな台詞を言ったのは、映画の撮影を含めても、今が初めてである。探し物が形ある物ならこんなことを言う必要はないのだが、探し物は、なんというか手掛かり？真相？犯人？どれを見つけるかはイマイチ分からない。

「とにかく、一つ見つければ何とかなるか。」

僕はそんなことを言いながら、廊下を歩いていった。

具体的な探し物の結論は「アヤの台本を書き換えた証拠」となるだろう。

通常、刑事ドラマや探偵物の物語には犯人が証拠とセットになってENDを迎えられるわけだが、僕なりの終わりには、証拠だけである。証拠があればアヤが台本を書き換えてくれる。最大の願いである・

日をまたいでの行動になるかもしれないが、そんなことを言っ

ている余裕はなかった。何しろ、僕が証拠を探している間にも怠けるのが嫌いなアヤの事なので、映画の撮影は進んでいってしまう。何とか、問題のシーンは1番最後に撮ることにしてもらったが早く見つけないとアヤがしびれを切らして、

「もうこのシーンでいくわよ！とつとと涙を流しなさい！駄目なら私が泣かせてあげるわ！！」

となる予感がした。・・・自分の想像力もこんなふうになると考える物である。

「悪い方向は駄目だ！捜さないと。まずは、まあ無難に当夜から聞き込みだな。」

1番行動を共にする機会が多いのであまりいい情報が得られるとは思わないが、聞かないよりマシだと思った。

「当夜は・・・あ、」

僕はあることを思いだしてしまった。

「学食に行ってたんだっただ・・・」

証拠を探す前にこの微妙に忘れっぽい性格を治したい、と僕は思いつつ、学食に戻ることにした。

ちなみに、さつき学食を飛び出してから45分が経過していた。〈
琴結学園 中央校舎 2階学生大食堂〉

「・・・さすがにいないか」

現在時刻、6時15分前後。

時間的に生徒の数が増えており学食は、小、中、高校生と様々な年齢層でごった返していた。しかし、とうの捜している人はさすがに45分以上もたつと居なくなるのは当然である。

僕は学食から出ることにした。

「あれー？リト、何してるー？」

誰かに背後から呼ばれたが、話し口調で顔を確認しなくても、誰か分かってしまう。

僕は振り向いて声の方に行き話し始めた。

「食堂で遠くから話しかけるな、千秋。」

「うー。呼んであげたのに、リト、ひどーい！」

近寄って文句を言うと千秋は怒ったような顔で反論した。

「はいはい。僕が悪かった。」長引くのを避けて謝ることにした。しかし、

「うー。そんなんじゃ許してあげないー。」

半ば怒っている理由が、あまりに小さいため僕はため息をつきたくなってきた。

さっきの僕の言動に千秋にとってかなり不機嫌になる部分があったようなので、振り返りたいところだが、振り返る以前に思い出せない。

「じゃあ、どうしたら許してくれる？」

一応まともに返答することにした。

「（ここで適当な発言をしたらまた長引きかねない・・・）」

そんなことを思い立っていた。僕がそう答えると冗談を言うような顔が何故か千秋から消え、少し真剣な顔で考えるポーズになってしまった。

何故？

「あ、あのさ千秋・・・」

「待つて！もう少し考えさせて。」

いや、そうじゃなくて・・・

受け流すために言った台詞のはずだったのに何故か真剣に考え始めてしまった。

そんなに僕にさせたいことがあるのだろうか？

千秋の中の僕の扱いを1回覗いてみたくなってきた。

千秋の考える体勢が始まってから1分以上経過している。1分とはほどほど短いようで待つと長いのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「

いつまで体勢崩さず3点リーダーを繰り返すつもりなのか。
話しかけてきた時の千秋のキャラはいずれこへ。

「あ、あのさもういい加減に――」

「よし！決めたー！」

キャラ復活ー！！

こんなに息苦しいとは思わなかった。

「やつとか。で、どうすれば許してくれるんだ？」

「んとねー。今度私と1日買い物付き合ってー。」

「え？それでいいのか？」

結構長い時間使って捻り出したから、もっととんでも要求が来るのかと思つたが意外に普通だった。

キャラを無視した意味は！？

「うん！たまにはゆっくり遊びたいし。」

キラキラした表情で答えてきた。千秋がいいというなら僕は構わないのだがそれでも疑問がある。

「でもさ、買い物つて言つても行けるとこは」

「いいのいいの。リトが私の荷物全部持ってくれるだけで。」

「え！？」

そう言つと、千秋は自分のテーブルの上の食器を片付けにカウンターに言つてしまった。

そして帰ってくるなり一言。

「行く日、決めたら誘うからー。じゃあねー」

「え？ちよつとー！」

そう言い千秋はそそくさと、学食から寮の方に帰って行ってしまった。

結局何も進まず仕舞いに終わってしまった……一応残せるものは残しておこう。

あの黄色い髪をした、語尾を伸ばす特徴がある奴。名前を千秋チアキという。クラスメートである。

これ以上いても意味が無いので……あれ？

「そついえば何しに來たんだっけ？……あー！」

30秒考えて、何とか思いだした。やっぱり物忘れは改善するべきだと思う。

「当夜はいないし、千秋は……まあいいや。次はどこに行こう。」

始まりだしは悪いが、まだ時間はある。諦めるわけにはいかないの
で再び知人を思い出すことにした。

2話「聞き込み？開始」（後書き）

さて、2話目で思うことかどうかは別として、一言言つと、「これ、ネタ大丈夫かな!？」

と思うことが書いているときしばしばあります。
ノリで頑張るしかないと言ひ聞かせる。

それが最近の目標です。

3話「聞き込みから得るもの」

情報収集が僕の中で続いているのは当然である。

千秋と聞き込みにならない聞き込みをしてからすでに3日聞き込みを続けている。千秋との会話を反省し雑談に話がズレないように聞き込みをしているのだが、思うような情報、手掛かりは掴むことができずにいた。

ちなみに、この聞き込みを続け思ったことが一つ。

もし有力な情報を持っている人に出くわしたときに多分僕は思うことが一つあるような気がした。

「（もし、有力な情報を知っていたら・・・その人はただのストーリーカーなのではないか？）」

そんなことを僕は余談で考えていた。まだまだこんなことを考えるのでおそらく気持ちに余裕があるのだろう。本来慌てなくてはならないはずなのだが。

聞き込みを続けていくには、交遊関係や人徳が左右してくるのは当然である。

ちなみにこれが左右しないのは刑事という職業だけらしい。

そのため自然と人数は限定されてくる。

僕はなんとなく聞き込みをした人間、これからできそうな人間を捻り出してみることにした。

「・・・んと、」

アヤ

当夜

千秋

途成

草奏

・・・先に印象が濃い人間をあげてみた。

『アヤ』・・・当事者なので意味ないし

『当夜』・・・やはり行動が一緒のため意味なし

『千秋』・・・主旨が逸れたので駄目

ちなみにほかの二人にも聞き込みを試みようと思ったのだが、はっきり言ってやめることにした。理由は途成は特に聞いても問題は無いのだが、問題は草奏である。

「私がどうかした？」

「いやな、草奏に聞き込みをするのは・・・」

僕は嫌な予感満載で後ろを振り向いた。

「うわあああ！」

僕は思わず後ろに下がってしまった。すると

「何よ！失礼ね。人の顔見るなり大声だして。」

「・・・そう思っただったら急に背後に立たないでくれ・・・」

大分寿命が縮んだ気がした。
心臓に悪い。

「ところで私がどうかした？」

「え！？」

「だからさっき私の名前呟いてたわよね？」

「え、えと・・・」

台詞化したつもりはなかったのに何故か声に出していたみたいだ。
というか言ったとしても小声の独り言だ。

恐ろしい地獄耳である。

後が怖いものにはごまかすしかない。

「いや、なんとなく思い出しただけだよ。深い意味はない。」

これでひっかかるとは思っていないが、言うしかないので仕方なかった。

そして肝心の反応は

「ふ〜ん。まあそれならいいけど。」

煮え切らなすぎで、逆に怖い・・・ここは言葉を信じるしかない
と思った。

「ところでさリト。」

「ん？何？」

草奏から話を変えてきた。とりあえず安心感が広がった。

「途成君見かけなかった？さっきから何処にもいないのよ。」

「いや、僕は見てないけど。何か用事なのか？」

「い、いや、た、たいした用じゃないんだけど……………」

「？」

何故か途中で言葉を区切り沈黙状態になってしまった。

僕何かおかしいな質問でもしたのだろうか？

「草奏？どうかし——」

「あ——！！私、用事を思い出した！じゃあねリト！」

「へ？お、おい！」

僕の呼びかけに答えず、叫んだのちすぐに僕の視界に入らない場所に走り去っていった。

あの様子なので、なんとなく草奏の考えていることを想像してみる。

「（途成にまた無理難題を押し付ける気かな？）」

頑張れ！途成。

そう僕は心の中で呟いた。

途成を応援するつもりで呟いたのだが、それが逆に自分のしなければならぬことを思い出させた。

「しまった！情報収集しなくちゃいけないのに——！」

頭に手を置き、盛大に嘆いてみた。すると、

キンコーンカーンコーン

「ん？」

チャイムの音が鳴り、さらにアナウンスも聞こえてきた。

『まもなく5時になります。用の無い生徒はすみやかに寮に戻りましょう。』

現在時刻午後5時。

高校生からしてみれば、帰るには早い時間なのだが、何分この学園は小学生もいるので、早い時間でアナウンスが鳴る。

「ふー。仕方ない、一旦寮に帰っていろいろ考えよ。」

僕は早いなから寮に戻ることにした。ちなみにいろいろと言ったが具体的には何も考えていない。

琴結学園 生徒寮 第1棟

琴結学園の寮というのは3つの棟、簡単に説明すると3つの寮と呼ばれる建物で構成されている。寮の中といえはいくら3つに分かれているとはいえ全校生徒が帰る場所ということもあり、夜や登校時は大量の人でうめつくされあたかも、何かのイベントで並んでいる人のようにも見えるのだ。

そして、もう一つ変わった特徴もあるのだが、それはさておき僕は

長い廊下と階段を3階まで上りようやく自分の部屋の前に着いた。

「ふう。とりあえず、ちょっと寝てからまた考えよ。」

ガチャ！

僕は何気なくいつもの部屋に入った。すると、

「へ？・・・・・・」

「・・・・・・」

片方の沈黙は僕だが、もう片方は違う。僕の部屋と一緒に住んでいる、いわばルームメイトなのだが、この後に最悪の展開しか見えてこない・・・

「い、」

「い？」

「いやあああ！！！！」

バキ！！

「がつ！！！」

今のは何の効果音と台詞かというと、簡単だ。
殴られたに決まっている。盛大に、それはもう部屋の外の壁にぶち当たるくらいに。

「痛ててて・・・」

ボタン！

殴られた頬を確認していると扉が勢いよく閉められた。

「何も、あそこまで本気で殴らなくても・・・」

とは言ったが、さすがに本人にはまずい部分があったのだろう。いや、おそらく部分どころか全てなのかもしれない。

下着姿からさらに、裸になろうとした瞬間に扉を開け目撃してしまったら。

ハア・・・

「リト、何やってる？」

「ん？当夜か・・・見ての通りだ。」

僕は自分の頬を見せ、扉を指指した。

「んと・・・頑張れ？」

「ああ、大丈夫だ。疑問形は間違ってる。」

そう言うのと、当夜は心配そうな顔で去っていった。そして、殴られた体勢のまま3分が経過した。

ガチャ。

ゆっくりと扉が開く。そして顔半分が扉から覗かせ、僕に小声で話

しかけてきた。

「・・・もういいよ、入って。」

「・・・うん・・・」

僕は相槌を打って、黙って入ることにした。というかそうしないとまた展開が最悪だ。

僕達の寮の部屋は、ほとんどの部屋が間取りは同じなのだが、階によつて広さが微妙に違うということがある。

ちなみに僕の部屋は3階の関係上あまり部屋は広くない。

まあ広くはないが、窮屈とも言い難い、それなりの部屋だ。しかし、今の僕の状況的にはもう少し広いほうが良かったと思えてきてしまう。

「・・・」

「・・・」

部屋の中に入っても、僕とルームメイトの沈黙である。別にお互い話さなければならぬわけではないのだが、どうしてだか沈黙というか、雑談の一つも始まらない。

言っではみたが、僕はこの状況で雑談を始めるのはごめんこうむなる。

何も言えず、黙っていると、ルームメイトは立ち上がり一言呟いた。

「お、お風呂に入ってくる・・・」

「え？あ、どうぞ、ごゆっくり・・・」

そう僕が言つと、彼女は早足ともゆつくりとも言えない速さで風呂場に向かつていった。

自分がどうなっていたかは分からないがおそらく僕も相手も恥ずかしさが込み上げているような顔をしていたに違いない。

「（多分、恵なりに気まずい空気に気を使ってくれたんだろうな。）」

彼女の名前は、鈴崎^{すずさき} 恵^{めぐみ}という。

僕は恵が風呂に入つたのを確認すると、自分のベッドに寝転んでため息をつく。

「ふう。ああ、最近は運が悪いな。」

運が悪いというか、女難の相でも出ているのではないかと、言つた後に思つた。

「（そもそもこの寮のシステムに問題があるような気がするな。）」

琴結学園学生寮

多大な生徒数。小中高の全員が住んでいるので1部屋2人のシステムなのはいいのだが、問題は今の僕の部屋の様な現状が起こる・・・ほとんどの部屋が男女の相部屋というシステムである。

システムを今更嘆いても仕方がないと、僕は思った。
先程のどたばたのせいで少し忘れてしまっていたが、今僕が考えなければならぬことは他にある。

「あ！台本書き換えの犯人を捜さないで。」

そう僕は言うと、斜め後ろにある僕の机から映画撮影の台本を取り出す。

何か手掛かりがないかと駄目元で思ったからだ。

「・・・・・・・・」

ただ黙々と台本を読み進める。書いてある一つ一つの台詞に何か無いかと。

「え？屋上に？一体何しに？」

「それは教えられないな。気になるんなら自分で捜しにいけ。お前に止められるんならな。」

「何を言ってるんだ、寺門。」

「屋上という単語、そしてあの才能の無い奴のことだ、どうなるかはバカじゃないお前ならわかるよな。シヨウカ。」

「ま、まさか！」

「・・・・・・・・そしてこの後場面を変更してアヤから指摘をくらったシーンが入る。しかし所々場面説明や主人公の心境など台詞ではない部分を入れたとしても、アヤが書いた所とそうでないところの違いはまったく、分からない。」

「リツ君？何見てるの？」

「え？恵か。いつのまに出たんだよ。」

「さっきから出てたよ。リッ君、本に夢中になってるから。ところで何見てるの？」

この場合『夢中』ではなく『集中』の間違いだとなんとなく思った。何せ今は、台本を見ている主旨がちがうのだから。

ちなみにさっきの事は完全に落ち着いているようだった。なんだか、早すぎる気もしたけど良しとしよう。多分・・・本来僕にとって台本は台詞を覚えるためにある訳で、今回のような使い方はあまり好きではない。

「ああ。これは映画の台本だよ。」

「映画ってアヤちゃん達とやってる？」

「そう。でも、覚えるために見てるんじゃないんだけどな」

「え？じゃあ何のため？というか、台本って覚える以外で使うことあるの」

恵がもつともらしい質問をしてきた。僕も他人事だったら、そう見ているかもしれない。

「ああ。実はなーー」

僕はなんとなく、理由を恵に話すことにした。

琴結学園 生徒寮 第1棟 403号室

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いつまで無言でいるつもり？」

そう言ってるけど「触れるな！危険！」という発想しか受かんでこない。

「まあいいわ。あなたが無言を貫くということは私が何を言いたいか、分かるということよね？なら、話す必要も無いわね。」

現在部屋の中で、半ば正座で尋問状態の僕、途成です・・・何でこんなことになっているのかはすぐに分かります・・・

「とりあえず、単刀直入に私の一番聞きたいことだけ言っておくわ。どうして昨日アヤに台本の話を持ちかけたの？今一番台本の話題に触れてはいけなときのなのは、分かってるでしょ！」

僕も言わなければならないことだけは言っておく。

「そ、草奏さん。はつきり言っておきますけど、これ以上あのままにしておけば、ばれるのは時間の問題ですよ！」

「大丈夫よ。触れさえしなければ、事は勝手に書いた通りに進んでいくから。ばれたらアヤの事だからすぐに書き直すから問題無いわ。」

「でももし、やったのが草奏さんだってばれたらアヤさんに酷い目にあいますよ！」

脚本を書くのと、監督業務がアヤさんの独壇領域なのは映画撮影班の間では有名だ。当然妥協は許さない。それは草奏さんだって知っ

ているはず。

「その時はアヤに気の済むようにしてもらっわ。」

「でもそれじゃあ、」

「とにかくあまり余計なことを喋らないように。分かったわね途成君。」

ボタン！

そう言うと、草奏さんは自分の部屋に帰って行ってしまった。このままだと遅かれ早かれ、草奏さんの立場が危くなる。というのも、今の台本で事がしつかり進んでいるのなら僕はこんなことはしないしかし、この間の学食の会話と、3日間撮影現場に顔を見せてくれない主人公役のリトさんからして進んでいるとは思えなかった。

「明日、何気なくアヤさんに聞いてみよう。」

草奏さんは、ああ言っただけどやっぱりおっではおけない。

一連の理由を恵に話した僕は、再び台本に顔を戻す。

「理由は分かったけど、それって台本を見て分かるものなの？」

「分からないけど、他に手掛かりも無いし。かと言って何にもしないってわけにはいかないしな。」

「聞くけど、一回やってみるっていう選択肢はなかったの？」

「え？何を？」

「だから、一回涙を流すシーンをやるうとは思わなかったの？リッ君、結構演じるのうまいって評判だよ。」

その評判は知らないし、僕が演技が上手いかどうかは自分では分からない。

しかし、その発想は何故が無かった。何故だろう？

「分からないけど、無意識にやりたくないっていう気持ちになったのかも・・・」

改めて考えてみると、そうなるのかもしれない。何故か涙には抵抗があるのだ。

「よく分かんないけど、やりたくないなら私は別に強制してるつもりじゃないから。」

「うん。わかってる。ありがとう恵。」

とは言ったものの話はまったく前に進まない。それを思い出し頭を抱えていると、

「ねえ、リッ君？」

台本の予備を見ながら恵が話かけてきた。

「どうかしたのか？」

「あのね、たいしたことじゃないんだけど、これ間違ってるない？」

「？」

恵はそう言っと、台本のあるページを見せてきた。そこは何と台詞ではなく、場面と心境説明の文だった。

「このページのどこが間違ってるんだ？」

「うん。ここの」

「こんな間違い、アヤちゃんがするのかな？」

僕は今の部分を見て希望がわいてきた。

「ありえない。こんなミス、アヤがするわけない。」

「じゃあやっぱりこれは・・・ってキャー!!」

「ありがとう！恵。よく見つけてくれた。これでなんとかなる本当に有難う!!」

僕は希望が見つかった嬉しさのあまり、恵を抱き寄せた。

「わ、わかったから、わかったから／＼／」

僕は恵の言葉も耳に入らずしばらくそのままの体制でいた。

ちなみにその5分後僕は、恵を離すと。

「????あれ?おい、恵ー?」

「//////////」

何故か、体制そのまま硬直していた。

「（抱きしめたときに、首とか閉めちゃったかな?）」

だったら悪いことをしたと僕は反省することにした。

3話「聞き込みから得るもの」(後書き)

まだまだ、設定が穴だらけなこの小説ですが、どうか長い目でみて
ください。

キャラの名前に法則があるのくらいは気付くと思います。

では次で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6803m/>

琴結学園の荒日常

2010年11月14日06時36分発行